

絵図から見えること(12) — 道遊の割戸 —

佐渡金銀山最大のシンボルとされる「道遊の割戸」。いつ頃からこの名が定着したのでしょうか。

「佐渡古実略記」には、慶長6(1601)年7月15日に、鶴子銀山から来た3人の山師が、割間歩・六拾枚間歩とともに「道遊」を稼いだ、と記されています。

しかし、18世紀初期に描かれた「佐渡銀山往時之稼行絵巻」には、青柳の割戸と記され、その左下に「道遊間歩古口」が描かれています。このことから、当初は「道遊の割戸」と呼ばれていなかったことがわかります。

寛保元(1741)年の「相川八景序」には、「道遊の峯に輝く月」とあり、「道遊秋月 浮雲は秋風高く吹き晴れて 月のみひとり峯にさへゆく」と詠まれているので、この頃には「道遊の割戸」という呼び方が定着していたものと考えられます。海抜252メートルの山頂部を、幅30メートル、深さ74メートルに掘り割った様は、金に対する人々の熱意を知る上で大変重要な景観です。昭和13年5月18日、佐渡鉱山を訪

れた俳人高浜虚子は、「春山を二つに断てり 金ほると」と詠んでいます。

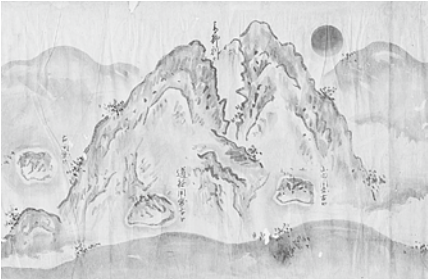
◆市役所世界遺産推進課

(金井就業改善センター内)

☎63-51336



文政11(1828)年、相川八景に描かれた道遊の割戸



「佐渡銀山往時之稼行絵巻」の冒頭に描かれた道遊の割戸



ジオパーク、推進日記

38

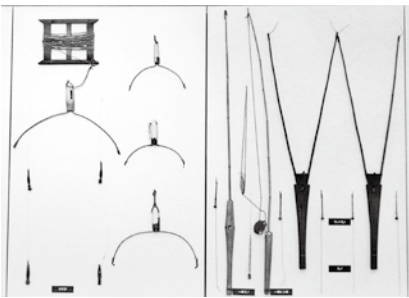
イカをいかに獲ってきたか

スルメイカの漁には長い歴史があります。年間を通じてたくさん獲れる、私たちの食卓になじみの深い魚介類として、佐渡の沿岸ではイカ釣りが盛んに行われてきました。

暖流に乗ってきたイカが、佐渡沖の寒流の壁に阻まれることで、大量に水揚げされるメカニズムについては、前号で紹介したところですが、多くのイカを水揚げするために、佐渡では漁労道具や漁法も同時に発達してきました。

イカは明るいところに集まる習性があり、そのため明るい集魚灯をたくさんつけたイカ釣り船が出漁します。沖の漁火は佐渡の風物詩でもあります。現代では巻き上げ機により釣り上げた

イカを獲り込みます。電気以前の時代には、船べりで火を焚いてイカを



佐渡式イカ釣り具

集め、ツノ・ヤマデ・ソクなどの道具を手し、イカを釣りあげていました。これらの道具が江戸時代の後期に佐渡で開発され、イカ釣り具や技術が日本海沿岸各地に伝わっています。明治時代の初めに行われた勸業博覧会にも、佐渡のイカ釣り具が出品されています。

また、大量に獲れたスルメイカを干して加工する技術も明治時代に進歩を遂げ、スルメの品質向上への努力が続けられました。イカ釣りや加工技術のうえで、佐渡は先進地であり、全国各地で佐渡のイカ釣り教師たちが指導にあたっていました。

このように、魚介類が豊富な地域には、海底地形や海流の影響があり、また、その魚介類を獲るために漁法や漁労道具が進歩を遂げている過程が、ジオパークを通して見てみると、よくわかります。

現在は「ブリ」が佐渡市の魚として親しまれていますが、イカも佐渡には欠かせない魚介類です。道路沿いのユニークな交通安全標語や下水道マンホールのふたなど、イカが描かれている場所を探してみてください。

◆教育委員会社会教育課

ジオパーク推進室(佐渡博物館内)
☎52-2447